View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

英語における派生名詞の分類についての覚え書き *

濱　松　純　司

1. はじめに

名詞が学校文法において重要事項の一つであることは論をまたない。(1) の destroying のような動詞を名詞化した動名詞（gerund）もまた重要文法事項の一つであり，調査した高校生用文法参考書 3 点（石黒 2009, 鈴木 2011, 吉波他 2012）のいずれも，名詞とは別に独立した章として扱っている。

(1) Their destroying this door (was a bad idea).

これに対し，(2) のような，動詞から派生した派生名詞（derived nominal）については，これらの文法参考書において独立した項目をなしているどころか，言及さえされていない。

(2) Their destruction of this door (was a bad idea).

(2) において destruction は動詞 destroy より派生した派生名詞であり，(1) の動名詞と異なり，後続する名詞との間に前置詞 of が出現する [1]。この種の名詞については，(1) の動名詞と同じ意味を持つにもかかわらず，文法項目としてはほぼ無視され，学習者が各自，英和辞典等を用いて単語毎に意味を調べるというのが，いわば暗黙の了解になっていると言える。

生成統語論において，(1) のような動名詞は統語部門において生成されるのに対し，(2) のような派生名詞は語彙部門（脳内辞書，レクシコン）で元

* 本研究は 2018 年度専修大学研究助成（研究課題名：英語における形態・統語に関わる言語事象の研究）の援助を受けている。

[1] (i) のように -ing 形が of 前置詞句を伴う場合があり，これも動名詞と呼ぶこともできるが，本稿では (i) のような場合も派生名詞として扱う。
(i) Their drinking of beer (was a bad idea).

になる動詞から派生（derivation）のプロセスによって造られてから統語部門に送られるという提案が Chomsky（1970）によってなされ，長らく主流となってきた。この点を考えると，学校文法における動名詞と派生名詞の扱いの差は理にかなっていると言える。一方で，動詞から名詞の派生は文法事項としては扱わず，辞書における記述に委ねるということであれば，学習者にはそれなりの配慮が求められるとも言える。

本稿では，英語における派生名詞の表す意味について，Grimshaw（1990）の研究を中心に検討し，次いで最近出版された Lieber（2016）が展開している，Grimshaw の分析への批判の妥当性を検討し，Grimshaw の理論の細部に問題点が認められる一方，反証と呼ぶには根拠が十分ではないことを示す。最後に，学校文法における派生名詞の扱いについて，辞書における記述を中心に見解を述べる。

2. 派生名詞の表す意味－Grimshaw（1990）の分析

派生名詞の研究，とりわけ理論言語学における先行研究で古典的なものとして Chomsky（1970）が知られているが，統語論のみならず，形態論や語彙意味論の分野においても，現在に至るまで多くの派生名詞研究の出発点とも言うべき地位を占めるのが Grimshaw（1990）の著作である。彼女の功績は，極めて複雑な性質を持つ派生名詞を客観的な基準を設けて分類することにより，その意味的な違いを理論的に説明したことである。彼女の挙げる（3a/b）間に見られる意味の違いを見てみよう。

（3） a. The examination of the patients took a long time.

b. The examination was on the table. （a., b. Grimshaw 1990: 49）

（3a）は「検査をする」という行為，または事象（event）を表しているのに対し，（3b）は「答案」のような事物を表している。Grimshaw は前者を事象名詞（event nominal），後者を結果名詞（result nominal）と呼んで区別した。

彼女は更に，事象名詞と結果名詞の違いは，前者が語彙の意味的性質の内，統語構造に反映される部分を表示した項構造（argument structure）を持つの

に対し，後者はそれを欠いていることによって説明されるとした。（3a）の場合であれば，派生名詞 examination の項構造は（4）の通り，動作主（Agent）及び主題（Theme）を含む。更に，事象名詞の場合，事象項（Ev）も他の項と共に項構造から受け継ぐと主張した[2]。

（4）　<Ev, Agent, Theme>

厄介なのは，（3a）と（3b）の間に大きな意味の相違が観察されるにも関わらず，形態面に何ら反映されていないことである。もっとも，（3b）の結果名詞の場合，（5）の通り，接尾辞を削り exam とすることができるが（5a），（3a）の事象名詞の場合は不可能である（5b）。この場合は，事象名詞・結果名詞間の違いが形態面に具現化されていると言える。

（5）　a.　The exam was on the table.

　　b.　*The exam of the patient took a long time.　（a., b. Grimshaw 1990: 49）

ただし，全ての派生名詞についてこのような形態上の短縮が観察されるということではなく，極めて限られている[3]。そこで，Grimshaw は事象名詞と結果名詞の 2 つの区別を立証すべく，数多くの根拠及びテストを示している。その一つとして，（6a/b）のコントラストから分かる通り，frequent/constant のようなアスペクトに関連づけられる形容詞が生起すると，補部（この場合は of patients）の省略を許さないという事実がある。

（6）　a.　The frequent/constant examination of patients in/for an afternoon leads to better diagnoses.

　　b.　*The frequent/constant examination in/for an afternoon leads to more accurate diagnoses.　（a., b. Grimshaw 2011: 1300-1301）

（6a/b）間のコントラストは，（7a/b）と全く同一の理由により，自然な形で説明することができる。すなわち，動詞 examine は項構造を持ち，（7a）ではそれが満たされているのに対し，（7b）では補部が欠けているゆえに満たされ

---

[2] 実際はこれらの項の間に上下関係があり，階層を成している点が重要であるが，本稿における論点には関係しないので，ここでは省いて表記した。

[3] Grimshaw（2004）は，identification/ID のペアを例として挙げている。

ないことにより非文となっている。

（7） a. They frequently/constantly examine patients in/for an afternoon.

b. *They frequently/constantly examine in/for an afternoon.

（a., b. Grimshaw 2011: 1301）

派生名詞の内，事象名詞が項構造を動詞より受け継ぐと仮定することにより，（6a）には存在する補部（of patients）が（6b）においては欠けており，項構造が満たされずに排除されると考えられるのである。更に，frequent 及び constant は事象名詞の持つ事象項を修飾すると考えると，これらの形容詞は事象項を項構造に内包する事象名詞とのみ共起することになる。

これに対し，（8）が非文であることから明らかなように，結果名詞は項構造を欠くので，frequent/constant とは共起せず，補部を取ることもない。

（8） *The frequent exam/examination was a mistake.（Grimshaw 2011: 1301）

見方を変えれば，形容詞 frequent/constant が派生名詞に付くことによって，事象名詞の読みをいわば「強制」するとも言える。その結果，（6b）及び（8）のように，補部が欠けると非文法的となってしまうのである。

事象名詞にとって項が義務的である点は，（9a/b）間の違いからも裏付けられる。

（9） a. *The instructor's intentional/deliberate examination took a long time.

b. The instructor's intentional/deliberate examination of the papers took a long time. （a., b. Grimshaw 1990: 51）

（9）において，examination の主語に当たる The instructor's が現れることにより，補部の存在が義務的となることが分かる。属格主語が examination の事象名詞としての読みを強制し，事象名詞は項構造を伴っていることから，補部が要求されるのである。従って，補部を持たない（9a）が非文となると考えられる。同じ現象は他の名詞についても広く観察される。（10a/b）の destruction は事象名詞であるので，補部の出現が義務的であるのに対し，（10c）の destruction は結果名詞であり，補部は伴わない。同様に（11a）の expression は事象名詞で補部を伴うが，（11b）では補部は存在せず，「表情」

という結果名詞としての意味を持つ。

（10）a.　The enemy's destruction of the city was awful to watch.

b.　*The enemy's destruction was awful to watch.

c.　The destruction was awful to watch.　（a.- c. Grimshaw 1990: 52）

（11）a.　the expression of her feelings

b.　The expression（on her face）　（a., b. Grimshaw 1990: 53）

事象名詞と結果名詞との区別を設ける更なる根拠として，目的節に関する事実がある。（12）のペアが示す通り，動詞と同様，事象名詞も目的節 in order to と共起する。

（12）a.　The translation of the book（in order）to make it available to a wider readership.

b.　The book was translated（in order）to make it available to a wider readership.　（a., b. Grimshaw 1990: 84）

これに対し，（13a/b）間のコントラストから分かるように，事象名詞（13a）とは異なり，結果名詞（13b）は目的節との共起を許さない。

（13）a.　（The）examination of the patient in order to determine whether ...

b.　*The exam in order to determine whether ...

（a., b. Grimshaw 1990: 84）

この違いは，目的節が事象項により認可されると仮定すれば，説明することができる。事象名詞は事象項を持ち，結果名詞には欠けているので，目的節と共起するのは前者のみということになる。

最後に，（14a/b）間のコントラストが示す通り，結果名詞が複数形を許すのに対し，事象名詞は複数形とは相容れない。

（14）a.　The assignments were long.

b.　*The assignments of the problems took a long time.

（a., b. Grimshaw 1990: 54）

以上の通り，大半の場合，事象名詞と結果名詞は見かけ上は区別ができないが，Grimshaw は意味上の区別のみに頼るのではなく，様々な基準を立て

ることにより，両者の違いを客観的に区別できることを示したのである。この点は，（15）のように，事象の意味を持ちながら，（16）が示すようにこれまで挙げてきた事象名詞とは異なる性質を持つ名詞が存在する事実によって，ますます重要になる。

（15）The event/race/trip/exam took a long time/took place at 6:00 P.M.

（Grimshaw 1990: 59）

（16）a. The frequent trip/event was a nuisance.

b. *That trip/event in order to ... （a., b. Grimshaw 1990: 59）

（15）の名詞はいずれも事物ではなく，事象を表すが，（16）の通り，事象名詞の基準とは相容れない振る舞いを見せる。Grimshaw はこれらの名詞について，事象を表しながらも項構造を伴わないとして，単純事象名詞（simple event nominal）と呼ぶ一方，これまで挙げてきた，項構造を持つ事象名詞を複雑事象名詞（complex event nominal）と呼ぶことにより区別した。このことにより，派生名詞は複雑事象名詞，単純事象名詞，及び結果名詞の 3 つに分類されることになる。これらの内，複雑事象名詞のみが項構造を持つとされる。

3. Lieber（2016）の問題提起

Lieber（2016）は，従来の名詞（句）研究において，言語学者が自らの直感に頼ってデータを判断することにより，本来の言語事実との乖離を引き起こしていると主張し，コーパスを用いて先行研究の問題点を立証し，形態論の立場より代案を提唱した研究である。前章で紹介した Grimshaw（1990）の理論もその対象となっている。ここでは，Lieber（2016）で引用されているデータ及び議論の内，本稿に関係すると思われる主要な部分を取り上げ，その妥当性を検証したい。

Lieber は事象の読みがあるにも関わらず，補部が現れない例として，（17a/b）を挙げている。

（17）a. The shouting of the angry crowd drowned the rest of **Pia Ahn's**

ranting.（of-PP missing）　（Lieber 2016: 38）

b. They did an excellent job of cleaning you up. You could pass an **admiral's inspection.**（of-PP missing）　（Lieber 2016: 39）

（17a）の ranting は,（18）に示す通り, 元の動詞 rant が補部を取らないので, of 前置詞句を伴わないのはむしろ当然であると言える。従って，Grimshaw の提案への反例とはなり得ない。

（18）As the boss began to rant, I stood up and went out.　（*COBUILD*[9]）

一方，（17b）の inspection は動詞 inspect から派生した名詞であるが，元の動詞は補部を要求する。属格主語 an admiral's が複雑事象名詞の読みを強制するとすれば，補部として of 前置詞句が出現することを予測する。（17b）はこの予測に反しているように見えるが，これは Safir（1991）が評価述語（evaluative）と呼ぶものの一種であると考えられる。Safir によると，これらの名詞は補部を欠きながらも他動詞から派生したものと解釈され，それらの名詞を目的語として取る，評価を表す動詞の主語が，名詞の補部と一致するという性質を持つ。

（19）a. This idea merits further consideration.

b. This approach warrants careful treatment.　（a., b. Safir 1991: 109）

（19a/b）において，それぞれ consideration/treatment は本来補部を取る名詞であるが，補部が of 前置詞句として実現されておらず，文の主語の This idea/This approach が各々補部として解釈される。（17b）に目を転じると，pass は評価の意味を持つことから，Safir の言う評価述語であると考えられ，先行する文から，名詞 inspection の意味上の補部は you であると考えられる。（17b）及び（19）の名詞句の実際の分析の詳細はどうであれ，（17b）は Grimshaw（1990）の提案への反例とするには，特殊すぎる構文に現れていることは確かなようである。

次に，Lieber は Grimshaw（1990）において複雑事象名詞と共起するべき修飾語句を含むデータを挙げているが，その内，Grimshaw の理論にとって問題となるのは（20）にある例である。

（20）a. **The frequent assumption** was that if a woman was sexually active, she would use the pill.

b. **The competition to lure investors** by waiving this tax has been termed a “fiscal war,” a vicious cycle of bidding in which states reduce their own tax revenues（and consequently those of their municipalities）and assume broad commitments in exchange for dubious economic benefits.

c. I learned to knit not just from my **mother’s intentional instruction,** but in the hours I simply sat and watched her flashing needles.

d. The road and the canyon and the mountain around them are inside the Toiyabe National Forest, the target of **Carver’s deliberate provocation.** （a.-d. Lieber 2016: 41）

（20a）は，派生名詞 assumption がアスペクトを表す形容詞 frequent と共起している。Grimshaw の理論によると，この場合，複雑事象名詞の読みが強制され，補部が出現することを予測するが，（20a）では補部が欠けている。これについて，Grimshaw（1990: 51）は，frequent/constant には事象とは関係のない用法があり，それは（21）のような複数形の結果名詞やある種の不可算名詞と共に起こる，と述べている。

（21）The constant assignments were avoided by students. （Grimshaw 1990: 51）

（20a）の assumption は be 動詞によって that 節と結ばれていることから，行為ではなく，「想定」「思い込み」と言った結果名詞の意味を持つことが窺える。従って，frequent と単数名詞が共起しているものの，この場合，Grimshaw の統語テストへの反例とは言えないと言える[4]。

（20b）について，目的節を含む例として Lieber は紹介している。この例については, 2 つの問題がある。一つは, Grimshaw（1990: 178）も指摘する通り，

---

[4] 一方で Grimshaw（1990: 178）は次の例を挙げ，この例がなぜ補部を伴わないのかは不明だとしている。

(i) Only frequent examination by the doctors kept John healthy.

to 不定詞節は目的節の他，名詞の直後にあっては関係詞節として，形容詞的に名詞を修飾する機能をも持つ点である。この理由から，彼女は複雑事象名詞であることを示すテストとして, in order to を用いたのである。次に, (20b) の不定詞節が competition の補部となっている可能性である。このことは，元の動詞 compete に to 不定詞節が後続することによっても裏付けられる。

（22）There are too many magazines competing to attract readers.　（*OALD*[9]）

（20b）の分析については不明な点も残るが，即座に Grimshaw のテストへの反例になるとは言い難いと思われる。

（20c/d）はどちらも属格主語を伴い，かつ動作主の存在を示唆する形容詞と共起している。このことから，どちらの名詞も複雑事象名詞であることと，補部が義務的であることを予測するが，（20a/b）のいずれも補部を伴わない。この内，属格主語については注意すべき点がある。Grimshaw は（23）/（24）の例を挙げ，属格「主語」には，動作主の他に所有者（Possessor）の読みがあると主張している。

（23）（*）The instructor's examination took a long time.

（Grimshaw 1990: 51）

（24）a.　*The instructor's intentional/deliberate examination took a long time.

b.　The instructor's intentional/deliberate examination of the papers took a long time.　（a., b. Grimshaw 1990: 51）

（24a/b）において，動作主の存在を示す intentional/deliberate を加えると，補部が義務的になることが分かる。このことから，（23）が容認される際，属格主語 The instructor's は動作主ではなく，所有者としての解釈を受けていることになる。（20c/d）は，それぞれ intentional/deliberate を含んでいるので，属格主語は動作主となり，従って名詞 instruction/provocation はどちらも複雑事象名詞として項構造を持つことになり，補部が義務的になる筈である。ここでもう一点，留意しなければならないのは，Grimshaw（1990: 52）も指摘しているが，動作主の存在を示す形容詞 deliberate には，（25）のように動

作主とは無関係に「ゆっくりと」「思慮ぶかく」といった様態の意味を表す場合があるという点である。

（25）She spoke in a slow and deliberate way. （*OALD*[9]）

（24a）において deliberate が様態の解釈を受ければ，（23）は容認されると Grimshaw は述べている。ただし，intentional の方にはそのような曖昧性はない。

（20c/d）に戻ると，属格主語の方は所有者としての解釈を受けていると言うことは仮に可能であるとしても，intentional/deliberate はいずれも様態ではなく，Grimshaw の言う，動作主に関わる形容詞であると言える。（20d）は引用元のコーパス（COCA）を検討しても，文脈上，Carver が意図的に行ったことであることが読み取れる上，名詞 provocation 及び元の動詞 provoke 共に，動詞の意味に意図を内包していると言え，deliberate によりその意味が補強されると考えるのが自然であると思われる[5]。

これらの事実から，（20c/d）については，intentional/deliberate が複雑事象名詞の存在を示すテストになっているとは言いがたい。名詞 instruction/provocation は項構造を伴わない単純事象名詞であると結論づけるのが妥当であると考えられる。'deliberate provocation' で COCA を検索した結果，14 例中，実に 13 例が（26）に示したような補部を伴わない例であることからも，同じことが言える。

（26）a. ISIS threats to Shiite shrines are a deliberate provocation...

b. Attending that film will be interpreted by the department as a deliberate provocation.

c. I suggested that the bathos of Bernstein's Whitman setting was a deliberate provocation... （a.-c. COCA）

---

[5] provocation/provoke の英英辞典でのそれぞれの定義は以下の通りである（太字は筆者）。
（i）the act of doing or saying something **deliberately** in order to make somebody angry or upset（*OALD*[9]）
（ii）If you provoke someone, you **deliberately** annoy them and try to make them behave aggressively.（*COBUILD*[9]）

ここまで Lieber（2016）が Grimshaw（1990）の理論に関して挙げたコーパスからのデータについて，主なものを検討した。大半のデータについては，Grimshaw の名詞の分類の基準に対する強い反証とはなり得ないことが分かった。一方で，動作主の存在を示すとされる形容詞 intentional/deliberate についてはテストの信頼度に問題があることも判明した。

4. 英語学習者にとっての派生名詞の分類ー結びに代えて

形態上の違いがないことから，派生名詞を明確に分類するのは至難の業である。判別する基準を設けても一見反例と思われる例が次々と現れる。それにも関わらず，前節で見たように Grimshaw（1990）は派生名詞の分類にかなりの程度，成功しているのもまた事実である。もちろん，英語教育の現場に理論言語学における詳細な論証のプロセスをそのまま持ち込むことは有害である。一方で，分類した派生名詞の間で規則的に違いが観察されるのであれば，その規則性を学習者に示すこともまた有益で，かつ必要なことではないかと思われる。(27) は学習用辞典の一つにおける派生名詞の記述である。

（27）destruction【［派］← destroy［動］】

①［…の］破壊（行為）［of］‖ the destruction of a city by air attack 空襲による都市破壊 / weapons of mass destruction 大量破壊兵器 / The war brought death and destruction. その戦争は死と破壊をもたらした .

②破滅状態；滅亡　③［one's ～］（人の）破滅の原因 ‖ Drinking was her final destruction. 飲酒が彼女の命取りになった .

（ジーニアス英和辞典第 5 版）

①の用例はいずれも複雑事象名詞ないしは単純事象名詞であると思われる。②及び③は結果名詞である。動詞 destroy から派生したことも明記されているが，①の用例については元の動詞の性質（理論的には項構造）が深く関わっていることから，学習者が destroy の意味・用法を確かめることも重要になる。

事象名詞と結果名詞との区別が理解できていれば，それぞれの派生名詞毎にその場しのぎで語義を追うのではなく，派生名詞について見られる規則性から，派生名詞が表す意味を統一的に把握することが可能となる。この観点から，（27）と同じ英和辞典では，派生名詞 examination の語法欄として（28）のような記述があるのが注目に値する。

（28）an examination of students は「学生を試験すること」の意で，
examine students の名詞化表現 .　　（ジーニアス英和辞典第 5 版）

（28）の用例において，派生名詞が補部を取るにも関わらず，不定冠詞が付いているのはひとまず措くとして，名詞句と動詞句との間に見られる並行性について具体的に説明されている点が学習者にとって重要である。ただし，これは「試験」のみならず「調査」「診察」といった examination が持つ他の意味についても同様に当てはまることである。辞典の極めて限られたスペースで語義毎に記述する余裕はないのは明らかであり，ましてや全ての派生名詞について言及することは非現実的であり，辞書に期待される役割を逸脱してしまうことになる。（28）の記述にたまたま学習者の目が留まったとしても，examination について元の動詞との関係を把握するのが関の山で，他の派生名詞についても動詞との関係を意識するところまで学習者の注意が及ぶかどうかは心許ないと言わざるを得ない。

学習者に対しては，派生名詞が動詞から形態的に派生することをまず指摘した上で，事象名詞・結果名詞に分類されることを代表的な例と共に教え，いくつかの派生名詞について，辞書における記述を一緒に追って見せることで，その後の語彙の習得が効率よく進むことが期待される。ただ語義に飛びつくのではなく，英語母語話者の持つ直感に近い形で，派生名詞の意味を深く理解することに繋がるものと考える。本稿で論じた派生名詞の分類について，現状では学習者用の文法書にも辞書にも体系的な記述が見当たらないが，何らかの場で学習者に伝える価値があるものと思われる。同時に，本稿での論考を通じ，理論言語学が間接的な形で外国語学習に資する一つの例を提示した。

参考文献

Chomsky, N.（1970）. Remarks on Nominalization. In R. Jacobs and P. Rosenbaum, eds. *Readings in English Transformational Grammar*（pp. 184-221）. Waltham, Mass.: Ginn and Company.

Grimshaw, J.（1990）. *Argument Structure.* Cambridge MA: MIT Press.

Grimshaw, J.（2004）. Why Can't a Noun be More Like a Verb? Paper presented at the International Conference on Deverbal Nouns. Lille. September 2004.

Grimshaw, J.（2011）. Deverbal Nominalization. In C. Maienborn, K. von Heusinger, and P. Portner eds. *Semantics: An International Handbook of Natural Language Meaning*（pp. 1292-1313）. Berlin: Mouton de Gruyter.

Lieber, R.（2016）. *English Nouns.* Cambridge: Cambridge University Press.

Safir, K.（1991）. Evaluative Predicates and the Representation of Implicit Arguments. In R. Freidin ed. *Principles and Parameters in Comparative Grammar*（pp. 99-131）. Cambridge MA: MIT Press.

石黒昭博（2009）『フォレスト総合英語』第 6 版．東京：桐原書店．

鈴木希明（2011）『総合英語 be update』東京：いいずな書店．

吉波和彦・北村博一・上野隆男・本郷泰弘（2012）『ブレイクスルー総合英語』改訂二版．東京：美誠社．

辞典類

Collins COBUILD Advanced Leaner's Dictionary of English. 9th Edition（*COBUILD*[9]）

Oxford Advanced Leaner's Dictionary of English. 9th Edition（*OALD*[9]）

『ジーニアス英和辞典』第 5 版．東京：大修館書店．

コーパス

Corpus of Contemporary American English（COCA）. https://corpus.byu.edu/coca/.